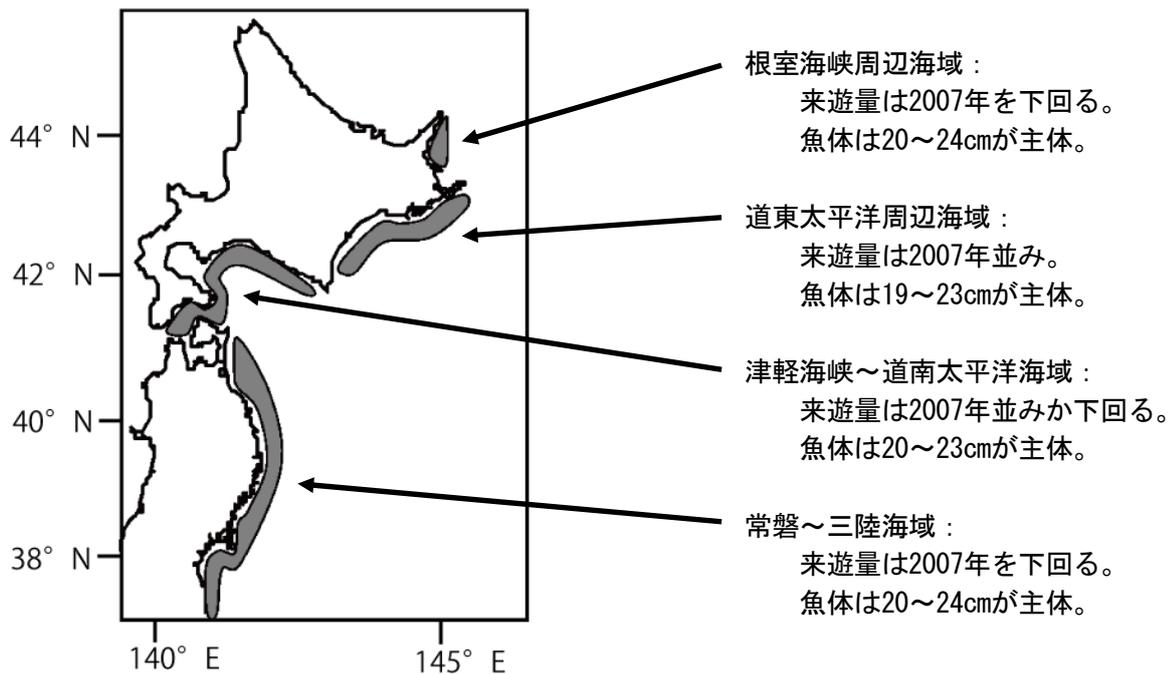


平成20年度第2回太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2008年10月～12月)のポイント



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、和田、染川

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

電話：0154-91-9136、ファックス：0154-91-9355

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成 20 年度第 2 回太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2008年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋、根室海峡周辺海域。

対象漁業：いか釣り、底曳網、定置網、まき網。

対象魚群：主に冬季発生系群（2008年級群）。

魚体の大きさは外套背長で表示。

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底曳網、定置網、まき網）

- （1）来遊量：2007年を下回る。
- （2）漁期・漁場：期間を通じて漁場となる。
- （3）魚体：2007年よりも小型であり、11月は20～24cmが主体。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- （1）来遊量：2007年並みか下回る。
- （2）漁期・漁場：期間を通じて漁場となる。
- （3）魚体：2007年よりも小型であり、11月は20～23cmが主体。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底曳網）

- （1）来遊量：2007年並み。
- （2）漁期・漁場：10月まで漁場が形成される。
- （3）魚体：2007年よりも小型であり、10月は19～23cmが主体。

4. 根室海峡周辺海域（いか釣り、定置網）

- （1）来遊量：2007年を下回る。
- （2）漁期・漁場：11月が漁期の中心となる。
- （3）魚体：2007年よりも小型であり、11月では20～24cmが主体。

漁況の経過（2008年6月～8月）および今後の見通しについての説明

（1）資源状態

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群を主体にし、それに秋季発生系群の一部が含まれると考えられている。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から推測すると、1970年～1980年代は低位水準で推移し、1989年から増加に転じ、近年では1996年（漁獲量：276千トン）が最も資源水準の高い年となった。増加に転じた1989年以降では、資源水準が大きく低下した年も見られたが、2000年以降はおおむね中位水準で推移していた。近年の漁獲量は2006年に減少したが2007年は増加した。なお、2007年の本予報期間である10月～12月の漁獲量は76千トンで、2006年同期の259%であった（表1）。海域別の漁獲量（生鮮）は、常磐～三陸海域は前年比243%、津軽海峡～道南太平洋海域は329%、根室海峡周辺海域は571%であった。一方、道東太平洋海域では減少し、前年比49%であった。

（2）関連調査結果

第2次漁場一斉調査および関連いか釣り調査（北海道立釧路水産試験場、北海道立函館水産試験場、岩手県水産技術センター、青森県水産総合研究センター、8月～9月上旬）によると、三陸南部～道東太平洋の各沿岸域を中心に漁獲され、岩手県沿岸、津軽海峡東口周辺海域、襟裳岬～根室半島周辺海域では高いCPUE（釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）を示す点が見られた（図1）。これら調査から算出した三陸～道東太平洋海域の平均CPUEは（5.91尾）であり、2007年（5.98尾）の99%、近年5年平均比の144%であった（表2）。

表層トロールネットを用いて実施した新規加入量調査（中央水産研究所・北海道区水産研究所、5月）によると、今漁期に加入すると予想される外套背長5cm未満の個体は、前年比881%（近年5年間の平均比210%）の高い水準にあった。

（3）2008年の各海域の漁況経過（主に6月～8月、一部未集計）

2008年6月～8月の高知県以東太平洋側主要港でのスルメイカ漁獲量（釣り、定置網、底びき網、まき網等；生鮮）は約18千トンであり、2007年（約30千トン）を下回り、近年5年平均比で約57%となった（表3、図2）。この漁獲量減少の原因として、冬季発生系群の資源水準は2007年級群に比べて2008年級群は低いことに加えて、産卵期あるいは成長の遅れにより本格的な操業の開始時期が遅れたことと燃油高騰などによる出漁隻数の減少などが要因と考えられる。以下に海域ごとに述べる。

・房総以西海域：高知県での釣りによる6月～8月の漁獲量は77トンであり、2008年（133トン）の58%であった。特に土佐清水港での漁獲量は70トンから1トンに減少し、CPUEも前年比27%となった。和歌山県での釣りによる6月～8月の漁獲量は69トンであり、2007年（69トン）並みであったが、田辺港とすさみ港のCPUEは前年比でそれぞれ71%、75%であった。三重県での釣りとまき網による6月～8月の漁獲量は597トンであり、2007年（126トン）を上回った。特に6月の奈屋浦港の中型まき網による漁獲量増加（458トン）が顕著であった。なお、釣りのCPUEは前年比62%であった。静岡県での釣りによる6月～8月の漁獲量は19トンで、2007年（24トン）を下回ったが、CPUEは前年比112%であった。神奈川県での釣りと定置網による6月～8月の漁獲量は6トンであり、2007年（2トン）を上回り、長井港における釣りのCPUEも前年比143%であった。千葉県での釣りと定置網による6月～8月の漁獲量は11トンであり、2007年（7トン）を上回った。

釣りの CPUE も 2007 年の 144%となった。以上のように 6 月～8 月の房総以西海域では、例年同様、海域や漁業種類により漁獲状況は変動しているものの、CPUE の変動から来遊量は三重県以西では前年を下回る水準、静岡県以東では上回る水準であったと推測される。

・**常磐海域**：茨城県での沖合底びき網および小型底びき網による 4～6 月の漁獲量は 51 トンであり、2007 年 (31 トン) を上回り、CPUE も 2007 年のそれぞれ 572%、433%に増加した。福島県での釣りおよび底びき網による 6 月～8 月の漁獲量はそれぞれ 31 トンおよび 51 トンであり、2007 年 (8 トンおよび 33 トン) を上回った。釣りの CPUE は前年比 108%、沖合底びき網の CPUE は 133%に増加した。以上のように、6 月～8 月 (一部 4 月～6 月を含む) の常磐海域では、前年を上回る来遊水準であったと推測される。

・**三陸海域**：宮城県での釣りによる 6 月～8 月の漁獲量は 724 トンであり、2007 年 (1,863 トン) を下回り、CPUE も 2007 年の 57%に減少した。また、底びき網による 6 月～8 月の漁獲量は 103 トンであり、2007 年 (594 トン) を下回り、CPUE も 2007 年の 34%に減少した。一方、定置網による 6 月～8 月の漁獲量は 663 トンであり、2007 年 (272 トン) を上回った。岩手県での釣りによる 6 月～8 月の漁獲量は 988 トンであり、2007 年 (3,272 トン) を下回り、CPUE も 2007 年の 80%に減少した。しかし、定置網による 6 月～8 月の漁獲量は 2,627 トンであり、2007 年 (1,213 トン) を上回った。青森県白糠港および八戸港での釣りによる 6 月～8 月の漁獲量は 2,386 トンであり、2007 年 (5,033 トン) を下回ったが、CPUE はそれぞれ前年比 95%、92%であった。八戸港のまき網による 6 月～8 月の漁獲量は 1,480 トンであり、2007 年 (5,771 トン) を下回った。以上のように、6 月～8 月の三陸海域では、定置網による漁獲は前年を上回ったものの、その他の漁業による漁獲量及び CPUE が減少したことから、6 月～8 月の来遊群の豊度は前年を下回る水準であったと推測される。

・**津軽海峡～道南太平洋海域**：青森県大畑港の釣りによる 6 月～8 月の漁獲量は 462 トンであり、2007 年 (963 トン) を下回ったものの、CPUE は前年比 93%であった。渡島支庁における釣りおよび定置網による 6 月～8 月の漁獲量は 5,661 トンで、2007 年 (6,100 トン) 並みであった。また、函館港近海における釣りの CPUE は 2007 年の 117%であった。胆振・日高両支庁における釣り、定置網等による 6 月～8 月の合計漁獲量は 1,128 トンであり、2007 年 (2,201 トン) を下回ったが、日高支庁浦河港における釣りの CPUE は前年比 109%であった。以上のように 6 月～8 月の津軽海峡～道南太平洋海域では、いか釣りの CPUE は前年並みか上回っていた一方で、漁獲量は前年を下回った。2008 年 6 月～8 月のいか釣り船の出漁隻数は、大畑港と白糠港でそれぞれ前年比 52%、73%に減少していることが、漁獲量減少の一因であると考えられる。これらのことから、6 月～8 月の来遊状況は前年並みであったと推測される。

・**道東太平洋海域**：道東太平洋海域での釣りによる 7～8 月の漁獲量は 311 トンであり、2007 年 (2,261 トン) を下回った。これは釣り漁業が前年よりも 1 ヶ月遅い 8 月下旬から本格操業となったことと関係が深いと考えられる。さらに釧路港における釣りの CPUE は前年比 73%となった。これらのことから、道東太平洋海域は前年を下回る来遊水準であったと推測される。

・**根室海峡周辺海域**：羅臼近海における刺し網と定置網による 7 月～8 月の漁獲量は 0.4 トンで、2007 年 (1

トン)を下回った。なお、釣りによる漁獲は9月23日まで確認されていない。

(4) 魚体の大きさ

・8月～9月中旬の漁場一斉調査(いか釣り)および関連いか釣り調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、18～21cm主体でモードが19cmの単峰型を示していた。2007年同期の調査結果では、20～24cm主体でモードが22cmであり、2008年は前年より全体的に2～3cm小さかった。海域別に見ると、三陸海域が17～20cm主体でモード18cm(2007年:22～25cm主体でモード23cm)、下北半島～襟裳岬以西海域が18～21cm主体でモード18、19cm(2007年:20～23cm主体でモード21cm)、道東太平洋海域(襟裳岬以東)が17～21cm主体でモード19cm(2007年:20～25cm主体でモード22、24cm)であった。

・宮城県沿岸で8月に底曳網で漁獲されたスルメイカのモードは16～18cmであり、前年よりも小型であった。道東太平洋沿岸で9月上旬にいか釣りで漁獲されたスルメイカのモードは20cmであり、2007年より1～2cm小さい。福島県沿岸で7月に漁獲されたスルメイカのモードは21～23cmと近年3年では大型であった。

・以上から、漁期前半においては福島県沿岸で前年よりも大型個体が漁獲されたものの、本予報対象海域全体では概ね前年より小型個体が主体である。

・10月～12月の漁獲個体は、前年よりも2～3cm小型の個体が主体になると考えられる。

(5) 今後の見通しの説明

本予報対象海域である常磐～根室海峡周辺海域の漁獲対象資源は、本年8月までの各地の漁獲量及びCPUEで判断すると、一部の海域では前年を上回ったものの、前年を下回った海域が多かった(表3)。ただし、2008年6月～8月の太平洋主要港における小型いか釣り船の出漁隻数は2007年同期の50%であることから、漁獲量の大幅な低下は、出漁隻数の減少も要因にある。

一方、第2次漁場一斉調査における平均CPUEは前年比99%であった。加えて5月に実施した新規加入量調査において高い水準(前年比881%、近年5年間の平均比210%)であった外套背長5cm未満の個体が今漁期に加入すると予想される。以上のことから本予測期間である10月～12月の来遊量は、2007年を下回るか、昨年並みの水準と予想される。以下、海域別に述べる。

・**常磐～三陸海域**:8月までの漁獲状況は常磐海域では2007年を上回っていたものの、三陸海域では下回っていた。さらに第二次漁場一斉調査および関連調査における三陸沖合のCPUE(釣機1台当たり1時間当たり漁獲尾数)は前年比53%であったことから、常磐～三陸海域の10月以降の来遊水準は、2007年を下回る水準になると推測される。

・**津軽海峡～道南太平洋海域**:津軽海峡～道南太平洋海域の漁況は道東太平洋海域からの南下群の動向と関連が深く、この南下群は津軽暖流の勢力減少にともなう水温低下とともに津軽海峡東口周辺海域から日本海に移

動すると考えられている。2008年の襟裳岬以東の道東太平洋沿岸域の来遊群は2007年並みと予測されている（後述）。しかし、9月～11月の津軽暖流の東方への張り出しは平年並みかやや弱勢で推移すると予想されており（東北海区海況予報 平成20年 No.3 2008年8月7日発行：東北区水産研究所）、スルメイカが津軽海峡東口周辺海域において滞留する期間が短くなると考えられる。そのため、津軽海峡～道南太平洋海域に来遊する資源水準は2007年並みか下回ると推測される。

・**道東太平洋海域**：10月以降に道東太平洋海域に来遊すると考えられる太平洋沖合北上群の来遊水準は、新規加入量調査結果では前年よりも高い水準であったが、第1次漁場一斉調査では大きく減少した。また、8月の十勝沖～根室沖におけるいか釣り調査のCPUEは前年比162%であった。一方、釧路港における9月上旬～中旬のいか釣りによる漁獲量は前年比149%であったものの、CPUEは前年並み（前年比91%）であった。以上のことから、道東太平洋海域に来遊するスルメイカは前年並みと判断される。なお、2000年以降、道東太平洋海域の主漁期は8月～10月であり、11月には漁獲量が大きく減少するため、今後は1ヶ月程度でこの海域の漁期は終了すると予測される。

・**根室海峡周辺海域**：根室海峡周辺海域の来遊に深く関係する国後島周辺海域の7月～8月の表面水温は、7月は近年3年平均並みであったが、8月は平均を下回った。このため、来遊条件としては前年よりも不適と推測される。なお、オホーツク海の表面水温は近年3年平均を下回って推移しているため、主漁期は11月以降と予測される。一方、根室海峡周辺海域に来遊する太平洋沖合北上群は、前年並みと推定されていることから、本海域に来遊するスルメイカは前年を下回る水準と推測される。

表1. 太平洋海域におけるスルメイカの10月～12月漁獲量（トン）

年	房総以西	常磐・三陸	津軽海峡周辺	道東・根室海峡	合計
1999	167	13,446	7,477	4,196	25,286
2000	185	19,848	22,469	32,550	75,052
2001	139	33,922	22,452	16,211	72,724
2002	148	42,041	8,802	7,482	58,473
2003	39	14,029	34,805	4,642	53,515
2004	100	25,828	12,891	7,449	46,268
2005	143	30,026	16,263	7,045	53,477
2006	85	13,397	9,139	6,604	29,225
2007	93	32,495	30,057	13,098	75,743

（釣り、定置網、底曳き網等による、生鮮）

表2. 第2次漁場一斉調査および関連調査(8月～9月中旬)における
いか釣り試験での操業地点数と平均CPUE(釣機1台1時間当たり漁獲尾数)

年	操業地点数	平均CPUE	年	操業地点数	平均CPUE
1992	65	15.43	2001	43	6.07
1993	56	3.38	2002	57	3.25
1994	35	2.16	2003	51	3.49
1995	41	1.46	2004	64	2.64
1996	49	3.94	2005	54	7.70
1997	45	5.14	2006	56	0.75
1998	38	2.67	2007	45	5.98
1999	48	0.53	2008	34	5.91
2000	56	4.83			

(集計海域：北緯39～43度，東経141～146度)

表3. 太平洋海域におけるスルメイカの6月～8月漁獲量(トン)

年	房総以西	常磐・三陸	津軽海峡周辺	道東・根室海峡	合計
1999	569	12,897	6,558	216	20,240
2000	412	26,466	7,948	2,706	37,532
2001	607	13,771	8,556	642	23,576
2002	538	15,531	11,721	96	27,886
2003	506	21,395	11,302	240	33,443
2004	822	24,200	10,701	1,546	37,269
2005	533	17,750	14,543	2,168	34,994
2006	533	7,126	11,004	412	19,075
2007	361	18,206	9,295	2,598	30,460
2008	779	9,199	7,361	311	17,650

(釣り，定置網，底曳き網等による，生鮮，2008年一部未集計)

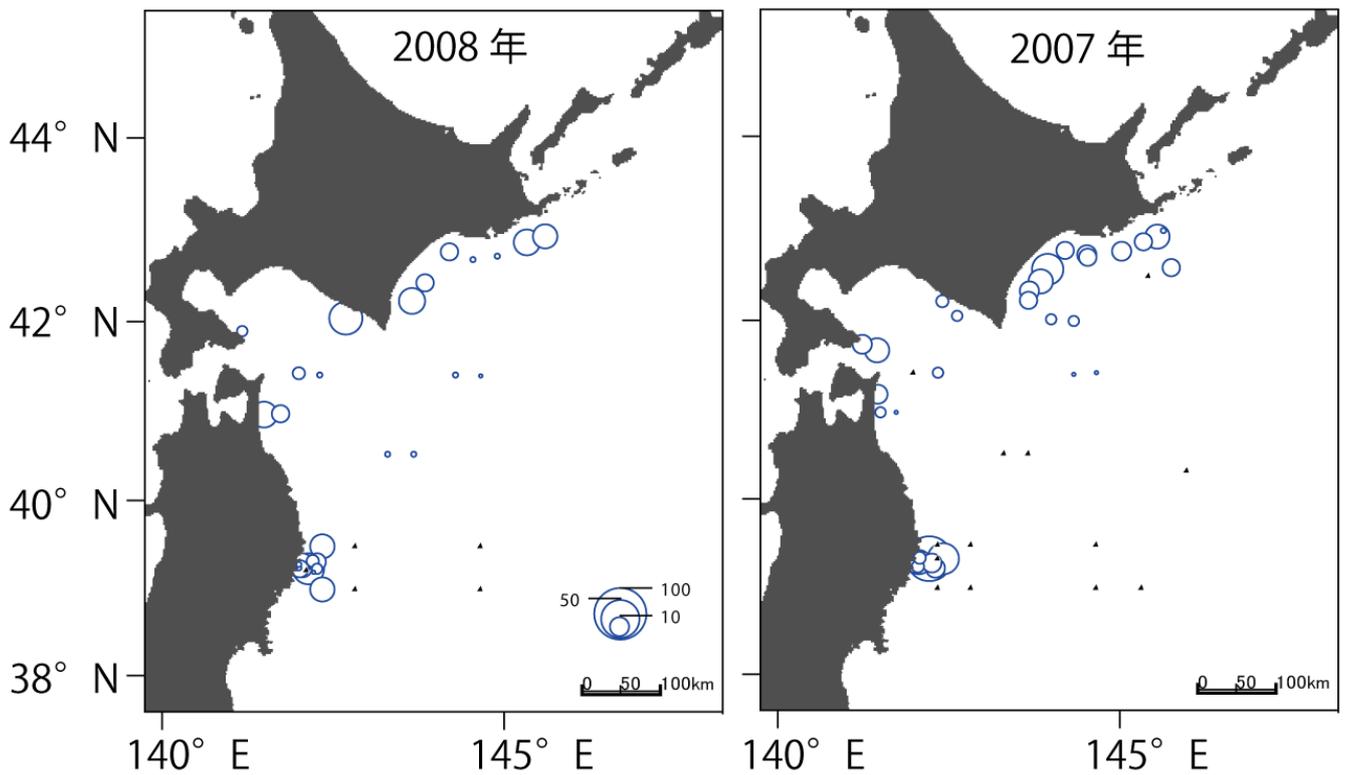


図1. 2008年と2007年の第2次一斉調査および関連調査（8月～9月中旬）における
いか釣り試験での操業地点とCPUE（釣機1台当たり漁獲尾数）、▲は漁獲なしの地点

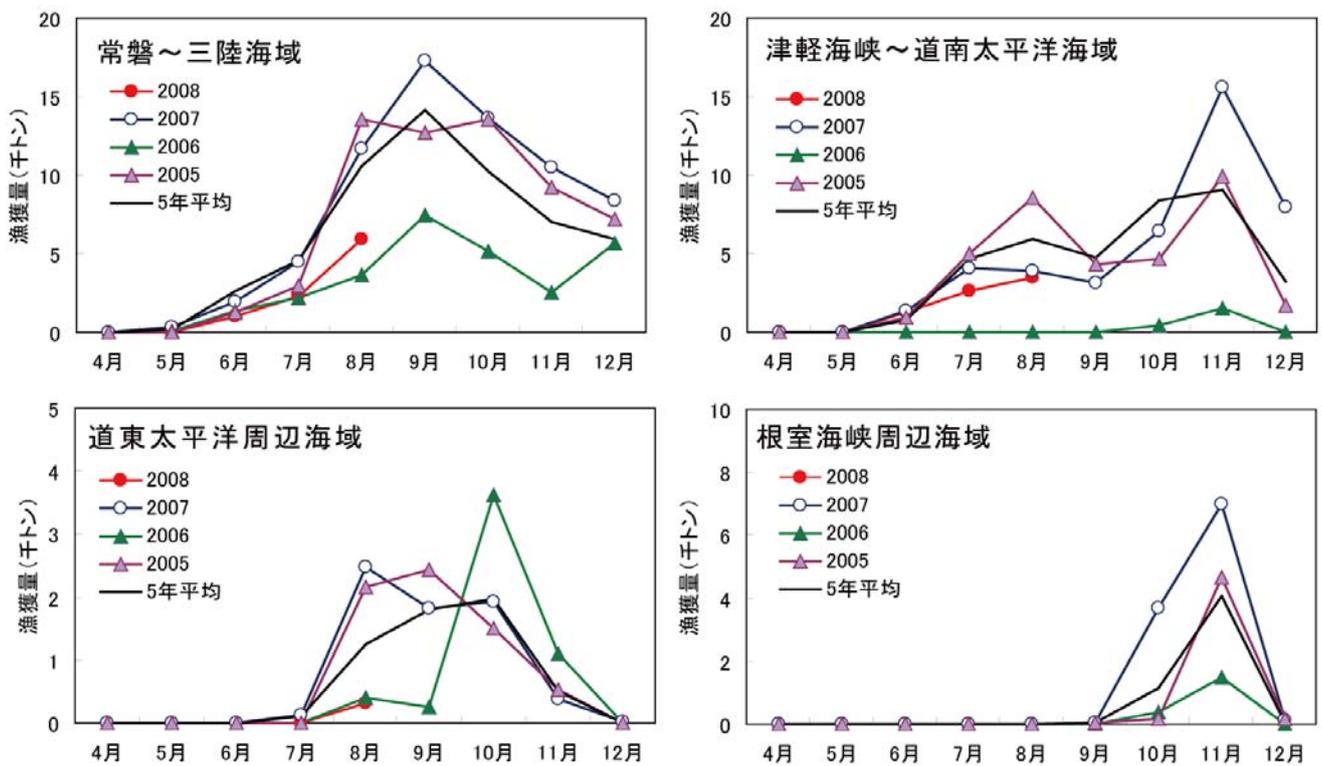


図2. 太平洋各海域の生鮮スルメイカの月別漁獲量（千トン）
いか釣り、底曳網、定置網、まき網等による漁獲量から集計

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	三重県水産研究所
北海道立函館水産試験場	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
青森県水産総合研究センター	高知県水産試験場
岩手県水産技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
宮城県水産技術総合センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
福島県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター
茨城県水産試験場	北海道区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	東北区水産研究所
神奈川県水産技術センター	日本海区水産研究所
静岡県水産技術研究所	